

# 横山由清著『読竹取物語解』

(天理大学附属天理図書館蔵・翻刻)

曾 根 誠 一

## 【書誌】

写本、一冊。天理大学附属天理図書館蔵(〇八一・イ一五・五九)、佐々木信綱旧蔵本。慶応三年十二月晦日摺筆の横山由清自筆稿本。後補された表紙の右上に「由清翁稿本／附箋木村正辞翁自筆」、左端に「読竹取物語解」と題簽に外題を墨書。内題も「読竹取物語解」。袋綴で料紙は楮紙。縦二四・六×一六・六種の半紙本。一面十行の罫線、柱に「雅語便覧」、喉の下部には「月舎梓」と印刷した料紙を使用。墨付き十七丁、遊紙はない。本文は漢字・平仮名・片仮名混じり文。自筆によるミセケチと書き入れの外、木村正辞による貼紙の書き入れが散見される。虫損あり。識語に「右竹取物語解一読之次注付所存了。堅固ノ之草案重而可遂再校者也ノ慶応三年十二月晦日 横山由清」とある。昭和四三年十月一日受け入れ。内容は、田中大秀著『竹取翁物語解』(文政十三年春刊)

を通読した際に気付いた事柄を記したものである。

## 【翻刻凡例】

- 一、本翻刻は、天理大学附属天理図書館蔵・横山由清著『読竹取物語解』(〇八一・イ一五・五九)を現在の通行の字体に翻字したものである。
- 二、翻字に際して、旧漢字は新漢字に改めたが、仮名遣いは原本の通りに翻字した。
- 三、行の変わり目は「／」で示し、丁の変わり目は「」で示して、( )の中に丁数と表・裏の区別を記した。
- 四、反復符号の「ヽ」、「ヾ」、「／」と、文中の傍線・傍点 は、原本の通りに翻字したが、割注の文中等で、組み版上表示できない例については、巻末に掲げた。
- 五、通読の便に配慮して、適宜に句読点を施した。
- 六、虫損等で判読不能の文字については□で示し、推定で判読した文字は、それを□で囲んで示した。
- 七、推敲過程で抹消された本文は、翻字した決定稿本文の右に記した【 】の中に示したが、判読できず、表示しなかった箇所があることを、お断りしておく。
- 八、見出しの語句の下に記された細字の数字は、田中大秀

著『竹取翁物語解』の巻数と丁数、オ(表)ウ(裏)の  
区別である。

九、木村正辞による貼紙は、貼られた位置を【上欄】【下欄】  
と区別した上で翻字し、その最後に「(貼紙)」と明示  
して、区別を容易にした。

### 【翻刻】

読竹取物語解／

(一行空白)／

裳モぎす一ノ五ウ 裳モ着キを体言にして、裳モぎすと、然する詞に  
よめる、髪あけさせとあるにかなはず。これは裳モぎすに  
て、きすは／□せきすると活用言にて、然せしむる詞、裳  
を着せしむるを／いへるなり。／

かいまみ一ノ十五ウ

垣間見の義なりといへる旧説、きこえ

ぬ／にはあらねと、なほ垣の言穩かならず。按に、かきは、  
かきひく、かき／よす、かきまするなど、手してするわさに  
そへいふ詞にて、まみは間／見の義、搔間見にて、かきの言  
軽くみるへきにや。』(一表)

人の物ともせぬ所一ノ十九ウ

物ともせぬは、物の数ともせ

ぬにて、俗に何トモ思ハヌなり。かいまみなとし、まどひ

ありけとも、そ／れを何とも思はぬ所なれば、何のしるしあ  
るへくもみえぬなり。／ものしもせぬの誤にて、人も不居ワラヌ所  
かといへる、中々にあしかるへし。／

こと、もせず一ノ廿オ 是も何トモ思ハヌよしにて、物をた  
に／いはむとて、いひかくれとも、何とも思はず、とりあは  
ぬよしなるへし。／

やうなき一ノ廿ウ

諸本に、ようなきとある、よろし。よう

／なきは用無にて、無用の義、即、いたつらに益なき意なり。  
この／用要益の事、なほ別にいふへし。／

【下欄】御説のことく／なるへし。(貼紙)

やめむとすれとも一ノ三十ウ

此詞、補はすしても、聞えか

たき』(一裏)文にはあらず。此人々、家にかへりても物を  
思ひ、いのりをし、願を／たてなとして、此事思ひやむへく  
もあらず、となり。／

我子のほとけへんくゑの人と申ながら一ノ卅二オ

我子の仏

／は、我仏といふに同じきよし、いへれと、いか、あらん。  
是はもし、ほと／け、へんくゑとつ、けいへる詞にはあ□し  
か。猶よく考へていふ／へし。／

あだ心つきなは一ノ卅六ウ

あなたは、転りやすく、変りやす

／きをいへることなから、こゝにては、世心ヨロコビといはんも同じ

く、男せんと思／ふ心のつくをいへるにて、解に、今我心軽く承引てといへる／は、かなへり。男の心變転て飽れんとき、といへる意は、此詞には』(2表) あらぬ也。すへての意は、わか形のよくもあらぬに、人々のふかき／心もしらすして、いふかま、に世心つきて、此事をうけひき／ゆるしなは、後に形のあしきによりて飽かれ、人の心の浅き／によりて、忘れなとして、悔しき事もあるへきをと也。／

人の心さしひとしかシなり一ノ卅八オ これよりを、翁のいへる／詞なりとある、いか、何はかりの云々あるより、人々にまうし／給へとあるまで、すへて姫のいへる詞なり。すへての意は、深き／心さしをしたらては、逢かたしといへるに、

翁の、抑いかやうなる心／さしあらむ人にかあはんと持思す。みなおろかにはあらぬ人々なり／といへるに、むかへて、それは、何はかり深き心さしをみるとには』(2裏) あらす。た、いさ、かの事をいふなり。かくいふよしは、今五人の／人々、ひとしく心さし深ければ、おとりまさりしられかたし。／よ

りて、いさ、かの事なれとも、わかゆかしと思ふ物をみせ給へ／といひて、それをみせたる人を、中にも心さし深しと思ひ／定めて、つかうまつらんとなり。／

おいらか一ノ四十九ウ 語例・俗訳ともに、ことたれるやう

なれと／言の本意を解かねは、あかぬこ、ちす。おいは老なり。らかは／やすらか、ほからかなどの、らかに同しく、形状をいふ言なり。俗に／年ヨリラシイといふ意の詞にて、おいづく、おとな大人しなといはんとく／ひにて、子どもの理なきかことくならず。物をよく弁へしりて、オト』(3表) ナシク、ジンシヤウナルの意にいひ転しては、无造作にの意にもつかへる／なり。／

うんじて一ノ四十九ウ 鬱の字音なりといへる、よろし。一証／とすへきを見出たれば、しるしそふへし。続日本紀卷廿

二廿三オ／詔曰遣唐大使藤原河清久不二来帰一所二鬱念也云々。

／ 猶この女みでは二ノ一オ 不見ではは、即、えではの意なり。

此説の／如くなれと、いひざま荒涼なり。見るは、我物にして逢見る事／にて、即ち、我妻にせずしてはの意にて、不得者ハの意になる也。／

したくみ一ノ一ウ 下巧シタクキの説、いか、あらん。支度シタククは、此解に引き／たる類聚国史・西宮記・続古事談・宇治拾遺・下学集などの外にも、物にみえ』(3裏) たり。また此の文、諸本ともに、心のしたくある人にてとありて、み／文字なし。

されは、下天羽衣の段に、た、かふへきしたくみをしたりととも

／あるによりて、こゝにみ文字を補はんよりも、下文のしたくみのみ／文字を衍字として、したくのかたにさためたらんかた、穩かなるへし。／支度は、用意することにて、心の用意ある人、戦ふへき用意をしたり／とみれば、こともなく明らかに聞ゆへし。／

【喉】（続古事談）宇治ニテ連歌ノ条 清輔、こはいかにと支

度たかひて、何となく□ひえて、をとりあかりたり云々（3裏）

【下欄】正辞按に、こゝのしたくと、下のしたくみとは／もとより別語なるへし。こゝは、必支度といふへ／き所なり。下なるは、前後のつゝきを見るに、支／度にてもきこえぬにはあらねと、したくみも／おもしろし。其説は其処に云へし。かく見る時は／こゝもかしこも、もとのまゝにてよろしき也。（貼紙）（3裏）

とほちの郡に同 とほちに、十市とかけるは、和銅六年の詔に／よりて、国郡郷名を二字に約めたるをりに、十□市と、ホ文字にあて／たる文字を省きたるにて、葛□上・葛□下カヅラキノカミ大和郡名・春□部尾張郡名／などの類なるよし、なほ多く証ともを挙て、答問雑稿撰臣著』（4表）にいへるか如くなるへし。

おもなきニノ六〇 按に、万葉集一巻に、よひに逢て朝面無美オモナ隠／にか云々とあるは、無二面目一の義にて、隠るゝ意なること、勿論なり。また／此物語・枕草子・源氏紅葉賀卷・梅枝卷など、中昔の物にみえたるは／此語の転変したるにはあらで、もとより別語にて、なくは、いらなく／□しろめたなくなどのなくにて、其事を強く甚しくいふ痛イタくなり。／即、面痛の義にて、俗にアツカハ、オシヅヨウなどいふ意なるへくや。／

見奉りおくりてニノ九〇 俗に、見送り奉リテの意也。／いかなる所にかニノ廿四ウ 注に、蓬萊山中に、何さまなる所にか、と／問へる也とあるは、委しきに過たり。たゝ俗に、トノヤウナ所ニカ、此木は』（4裏）さふらひけん、とゝへるなり。／

ゆくへすらもおほえすニノ廿七ウ 写本ゆくかたそら、諸本行方空／と有。按に、そらは、すらの転したるにて、此頃の詞つかひなる／へし。今昔物語十一卷に、鳥ノ音ソラ希ナル山中也、同十二卷に、心无キ／草木ソラ皆其ヲ知テ、同廿六卷に、犬馬ソラ哀ニ為ル人ニハ尾不振様ヤ／ハ候フ、同廿卷に、畜生ソラ云々。カソイロハアハレトミラムツハメソラフタリハ人／ニ契ラヌモノヲ、此外なほいと多くみえたり。さ

れは、ゆくかたぞら／**は**、ゆくかたすらにて、よく聞えたる  
詞なり。ゆくへすらとあらた／めたるは、中々にあしかるへ  
し。／

【上欄】辞按に、行方空ユクヘソラは、行空ユクソラといふに／方ヘといふ言  
の添りたるならんか。／今昔のソラとは、自から別なる  
／ことなるへし。猶考へ候へ。／（貼紙）

舟のうちをなんせめてみる二ノ三ノ十オ 　よりとをと通へる』  
（5表）事、上解九下の云しか如くなれば、此もをにて、より  
の意とすへしと／いひ、せめては、強て云に同じといへる。

いづれもいか、あらん。按に／上文に、あたりよりたにとあ  
るよりは、をの意なること、証を引て／いへるか如し。され  
と、それを証にして、このをも、よりの意なりとは／いひ  
かたく、「船の中より強て見る」といふ語意も、こにはか  
なひ／**か**たく寛ゆ。このをの言は、物をとり出ししいふ辞にて、  
せめてと云／へかゝる辞なり。せめては、逼セマてにて、逼セマりて  
の意、切セマ字の義／なれば、おのつから強セマての意にも聞ゆる也。  
されと、切セマては、其事に／深く心を入れて、一筋にするにいひ、  
強セマては、為し難きことを、あ／ななちに為るにいひて、自  
然シ別あり。こ、に引る枕冊子・空穂物』5裏 物語などの文、  
また、古今集恋二いとせめてこひしき時はぬは玉／のよるの

衣をかへしてそきる、などあるを、考へわたしてしるへき／  
なり。さてこ、に、舟のうちをせめてとあるは、船中にある  
かきり／の人、一筋におなし心に皆、この遙にみゆる山に目  
をつけたる／**よ**しにて、船中挙りてこれを見る**と**いはんか如  
く、それよりも／今一きはつよく聞なざる、詞つかひの、め  
てたきなり。／

呉竹のよ、のたけとる野山にも云々二ノ卅五ウ 　諸本に／二  
句たけとりとあるかた、よろし。校本には、さかしらに改な  
ほし／たるなるへし。さて、たけとりとは、此竹取翁の自  
の事を、呉竹／のよ、のたけとりと、体言にいひなして、年  
来竹を採る事を業と』（6表）する。このたけとりも、竹を  
とらんために、入り交りつる野にても山／にても、さはかり  
わひしきめをは、みしことなし。さてもく、皇子には／い  
みしくわひしきめをもみ給ひつるかな、といへるなり。竹と  
る／野山とつ、けいひても、心は聞えぬにあらねと、一首の  
語勢／緩ひて、感性浅し。誦し試みてしるへし。／

我たもとけふかわければ二ノ三ノ十六オ 　歌の意、解にいへる  
か如し。さ／れと、かわければとあるければの解、明らかな  
らす。今日、かくや姫に／相逢こと定りぬれば、心落着て、  
涙にぬれたる袖もかわきたり。されは／遠き海をわたりし

云々とあらは、明らかなるへし。／

是をたまはりて二ノ卅六ウ　かうやうの所を、たまひてとや

うに』(6裏) いへること、例なきにあらず。給て、たまひ

てなど書るも、あなち／に誤ともいひかたかや。下文四十一

オつかさも賜はんとアルモ同シ。／

けこ同　家子なることは、勿論なり。されと、ヤケコの省

なりと／いへるは、いか、あらん。本家・公家・家来・家

人・家司ケイジなど、いひなれ／たるうへにては、家子と音訓まし

へていふましきにあらず。か、／る例、尋ねてしるしそふへ

し。／

御つかひとおはしますへき二ノ四十一オ　按に、つがひ／にて、

番、字の義、相及ふことをいへるにてをしのつがひ、男と相／な

らふへき女の事にて、即、このは、俗に御夫婦ニオハスとい

ふ意／下御狩行幸の段に、つかひ給はめとあるは、この註にいへる如

く、使の意』(7表)意なり。猶、俊蔭巻に、よし御かたきをは知

り奉らし云俊蔭ノミケル条、御かたきハ、俗ニ相手ト云如ク。藤原

君巻に、かたきをえんするやうは／云々々ヘキ人ヲ、カタキトイレルナリ。

などあるかたきも、このつがひも、同意／の詞なるへ

し。／

ちやうぜさせ給ふ二ノ五十ウ　本居翁の、打擲の打ならんと

／いはれたる、よろし。枕冊子の、うちちやうして、とある

も同し。／宇治拾遺・落凹などは、懲のかたなるへし。／

たまざかる二ノ五十二ウ　魂避にて、即ち、死することをい

へるな／り。死もやしたまひけん云々と、上にいへるにかけて、

死することを／たまざかるといふは、是よりいひはしめける

也、といへるなり』(7裏)

うるはしき三ノ九ウ　うるは心なり。くはしは微スズシなり云々。

此註誤／れり。かくては、うらくはしの解にて、うるはしの

解にあらず。うる／は心なり。はしきは愛ハシキなり、などあるへ

き所なり。さて、按るに／「うるを」ワラケハシ心愛なりといへるも、猶いか、

あらん。うるは潤ウルにて、潤沢・光／彩あるをいふ言にて、是

を波行に活かして、うるひ／うるふと／いひ、また、うるほ

ひうるほふといひ、第一の音はに転してし／しく／じきと、

形状言にうるはしといへるなり。饒和ニキといふ言を、にぎ／び

にきふといひ、にきはひにきはふといひ、にきはしとも「また

／いふ言を」といふに同し。此類の言いと多し。次々にしるしそ

ふ／へし。されは、もと潤沢あるをいふより、美麗なるにも、

善愛なる』(8表)にも、端嚴なるにも、転しいへるなり。

／

歌よみくはへて三ノ十ウ歌註を作ヨミて添ツてと云意か。又は、よみには意なくて

唯／歌を副てと云意にもあらむか云々十一ウ 前説よろし。

後説／誤なり。神武紀〔古事記〕・枕冊子などのも、歌を作ユムことを、歌

よみといへる／にて、た、歌ウタ注にいへる但言の歌よみの上手、歌よみといふ意にはあらず。歌よむ事の上手、歌があるといふも、歌の上手、歌がある手、歌よむ人があるといふ意なるなり。／といふ意にはあらず。是を

うたといふ意としては、枕冊子に、歌／よみしておこせたるとあるは、歌してといふこと〔にまじ〕、古事記の作／御歌とあるを、ミウタヨミシタマフとよめるも、歌ウタ為給ふといふ事／

に〔まじ〕て、かゝる詞つかひ、あるへくもあらず。これは、もと歌は／誦ヨムものなれば、歌作るをも、やかて誦ヨムといひ、歌誦ヨムことを為スる〔8裏〕を、歌よみするといへるなり。／

けふこそは見ミめ同歌 みめとあるかた、よろしけなれと、写本のみ／にて、心ゆかす。諸本きめとあるは、赫映ツクシ姫の料、

また、わか料／などいふ、細かなる意はあらずして、た、衣に縁にきめといへる／中々に穩かなるへし。赫映ツクシ姫を見めといふ意にしては、却て／俄かなるやうにきこゆるは、わかひ

かみ、にや。／

是をまこと、思ひ給ひね三ノ十二ウ 諸本是をととあり。／

注に、をの下に真実と、言を加へて心得へし、といへるかことし。／さて、しか心得つるより誤て、本文にまこと、いふ

詞を、書そへ／つるなるへし。削去るへきなり。』(9表)

このくにの海山よりたつはおりのほるものなり三ノ廿二ウ

／おりは山より、のほるは海よりなり、といへる鈴木氏の説、くは／しきに過たり。こはた、龍は、此国の海にも昇降、

此国の山に／も昇降するものなり、といへるにて、ことなることなし。／

あしのむきたらんかたへいなむとす三ノ廿五ウ 龍のくひの玉／とりえすは、かへりくなどのたまふ故に、もとより、さ

る難き物／は、とるへくもあらず。とらねは、返るまじきなれば、はしめより／大納言のもとへはかへらぬ心にて、何方

にまれ、わか足の向／たらんかたへいなん、となり。俗〔俗〕にトコデモヨイ、ワカ勝手ノ方ヘユカン／といふ意也。解に、玉持たらむ龍の居所、そこと差所もある』(9裏) ましきなり

といへるは、誤れり。／

或は家にこもりぬ云々 同 解に、人の前にては、足の向たる方へ／いかんと云つれと云々といへるは、誤なり前にいへり

こ、に、或は、おのか／家にこもりぬ、あるひは、おのかゆかまほしき所へいぬ、とあるか／即、足の向たらんかたへゆきたるなり。／

事ゆかぬ同 心ゆかぬなどのゆかぬに同し。俗に、思フヤウ／テナイ」思フヤウニナラス」埒ノアカヌ」キニクハヌ」

などやうの意なり。／

漆をぬり蒔絵をしろへし給ひて三ノ廿八〇 色合イロヘス為る／と

いふ詞も、猶いか、あらむ。類本に、かへし「い」の字なくて、た、  
／うるしをぬり、まき糸をし給ひてとあるそ、よろしかるへ  
き。』(10表)

こたへてのたまう。やう四ノ十オ のたまふとあるへきを、う。

に／誤れり。／

何のれうにか同 用とある本、誤とも定めかたし。／

【上欄】用のかた、かへりてまさるへくや。(貼紙)

たゞし四ノ二オ たゞは徒タテにて、解の説の如し。しは、今し。  
など／のしにて、ことをつよくいひいる、言なるへし。／

おほるつかさ四ノ三オ 注和名抄に、大炊寮於保為乃豆加佐とあり。

按に、大飯の／義ならば、仮名於保比と有へきを、為とある

は、いか、云々。当時既く、比と／為と乱マヤシレて聞えしか。又、

比と為と、通へる例あるか云々已上解。按るに／和名抄のころ

ほひより、飯のかな、飯字をイ申と誤れるなるへし。／さて、大

飯をオホ申といひ、餅モチを用もちにひひかけ、大堰大堰謂也の義なる大井

河河(10裏)／紀略を、大炊河扶桑略記など、かけるなるへし。

／

屋のむねのつくのあなことに同 つしの誤かといへる説も

／穴ごとにとあるにかなはず。烟を出す穴とて、いくつも

あるものなる／へからねはなり。按に、つくは、束柱ツカの事に  
て、つかをつくとも／転しいへるならんか。束柱は、梁の上  
に立て、棟をさ、へうくるもの也。／(図〓省略)此処々  
を、穴といへるなるへし。即、燕の巢くふ／へき所なり。猶  
可考。／

／

あくらをゆひて同 県居大人の揚坐アゲクラの説、いか、。按るに

／あくらは、足坐アソクラにて、胡床も足を載るものなれば、いひて、

また／此文の如き足代アシロをも、あくらといへるなるへし。纏坐マキクラ

をまくら枕(11表) 寝坐ネクラ時、鳥坐トクラ同、鞍クラなど、同意の詞な

り。／

おほしめしわつらふ四ノ七ウ おほしわつらふとある本、よ

ろし。／

人々御ミくちに水をすくひ入奉る四ノ十七オ 御ミくちにといふ

こと／補はでも、よく聞ゆる詞なり。不調なるにはあらず。

／

御くしもたけて同 記伝五の後説、櫛を刺処なる故に／髪

をも、頭をも云なるへしとあるかた、よろしかるへし。／

からひつのふたに入られたまふへくもあらず四ノ廿二オ

高き所より落たるうへに、貝をもえとり給はぬ故に、御こ、

ち／もたかひて、腰をれたる人などは、韓櫃のふたなどに入  
て出給ふ／へきを、しかし給ふへくもあらぬはかり、いたく  
御腰はをれにけり』(11裏) といふ意なるへし。解に、子安  
貝を入へき料の唐櫃なり／といへれと、いかゝ。しかちひさ  
からん物を兼て、こと／＼しく韓櫃／など、設置へきにあ  
らず。ふたにたにと、たにの詞ありとても／よくきゝとらるゝ  
にあらず。猶可考。／

とかきはつるとたえ入たまひぬ四ノ廿五ウ と文字、なくて  
も／聞えぬ詞にはあらず。かきはつる、たえ入るとは、書は  
つる、すな／はち、たえ入といふ意なり。／

詞はぢしくいひければ四ノ卅一オ はちしくの詞、儀なきや  
う／なれと、はぢ／＼しくともいへは、かくもいふへき儀な  
り。いみ／しく、いみ／＼しく、いそしく、いそ／＼しく、  
けすしく、けす／＼しく、などの類也。』(12表)

たい／＼しく四ノ卅三オ 怠々の字音にて、懈怠、怠慢の意  
／にて、アルマシク「粗略ナルコト」打捨オクコト」にいふ  
なるへし。／

みつかさかうふりつかうまつりて四ノ卅七ウ つかうまつる  
とは／翁の官位を得へきほどの事のみを、赫映姫の翁に仕奉  
りて／の意なり。俗に、ホシカリ玉フ御官位ヲ、得玉フタケ

ノ御奉公ハスヘシ。サテ、実ニハ／帝ヲ欺キ奉ルナレハ、ヤ  
カテ死ヌハカリソ、となり。解の説、明らかならず。／

仰のこののかしこさに四ノ四十一オ 類本の字なき、よろ  
し。／

見付たるか、れば同 見付たる」にて、下に意を合たるな  
りと／いへれと、歌には例あれと、文にはいかゝあらん。諸  
本に、見付たるが／かれはとあるかた、よろしかるへし。見  
付たるがは、見付たるなるが』(12裏) の意なり。／

何か四ノ四十三ウ 鈴木氏の、とかくと云に同じといへるも、  
穩ならず。／猶可考。／

くちをしとおほして四ノ四十五オ 次下にも、おほしてとあ  
れは、重／りたるやうなれと、本のまゝ、よろし。せど、あら  
ためては、中々／にわろかるへし。／

御もとは同 諸本、御ともにはとある、よろし。めしつ  
れて／ゆき給ふことなり。／

かへるさのみゆき物うくおもほえて云々四ノ四十八ウ ての辞  
／意を云、不<sub>レ</sub>尽。言外に含めたる格なり云々といへれと、猶  
よく』(13表) 証儀考ふへし。／

かくやひめのみ御心にかゝりて云々四ノ五十二ウ 此所の文  
脈／「かくや姫のみ御心にかゝりて、御方々にもわたり給は

す、唯ひと／りすくし給ふ。よしなくて、かくや姫の御もと

にぞ、御文を／書て通はさせ給ふ」と、隔句に次第して心得

れは、こともな／く、やすらかに聞ゆ。解に、御方々にも渡

り給はずとあるを／かにかくと註したれと、かなひかたき説

なり。／

七月のもちの月に云々五ノ三オ 解に、月の盛の程にて、十

五ノ夜の一には非すと知へし、といへれと、しかにあは

ざるへし。／た、ん八月の十五夜には、天にかへるへければ、

十五日の夜にしも』(13裏) わきてせちに物思へる也。さて、

次下に、八月望はかりの月／に出居て、とある望はかりは、

十日已後20十五日前の月をいへる／なり。そは、天に昇るへき

十五夜の近くなるまゝに、いといた／くなくとなり。事情よ

く考へてしるへし。／

うましき世に五ノ四オ 美しく、美しきと活用せる、けに／

いとめつらし。猶可考。／

【上欄】辞按に、こは、美し世といふべきを、美しきと

いへるには／あらで、美し世といふに、し文字のそはり

たるなるへし。／そは、宝字二年の詔に、於母自岐人乃

とあるも、重き人／のといふに、し文字のそはりたるに

て、同例なるへし。／又、卷廿二の詔に、未之各時止各豆、

卷卅六の詔に、忘得／未之自美奈毛などあるをも、見るへし。(貼

紙)

是をつかふ者とも猶物おほす事あるへしとさ、やけと五ノ六

ウ /是をさ、やけと、か、る語脈なり。／

さらず罷ぬマカリへければ五ノ九ウ 本居翁も、鈴木氏も、さらす

は／宜しと云れたるよしなれと、猶、類本にさらはとあるか

た、穩か』(14表) なるへし。／

翁ことしは五十はかりなりけれども五ノ十六ウ 健冬の説、

よろ／し。作者の取弭たる過ならんといふは、わろかるへし。

源氏物語／などの事長きものには、さる誤もあるへきことな

れと、いかに口／にまかせたりとも、かく前にいへるを、忘

るへきにあらす。／

少将高野のおほくに五ノ二十オ 少は、中の誤なるへし。／

頭の字は、なきかよろし。下文に頭中將四十九オとかけるは、帝に／

御文奉らんに、藏人頭たよりよろしければ、別にことわり／

そへたるなり。／

さか尻を五ノ廿六オ(抹消)』(14裏)

た、かふへきしたくみ〇をしたりとも五ノ廿五オ したくみの

語例／此外にみえず。みは衍にて、したくをしたりとも、な

るへし。上にいへり。／

【上欄】したくみは、即ち、今俗に云シタグミにて、心構シカマヘを／することなるへし。こは、古えもいひし詞なら

ん。／そのくむは、物をクミタツル、又、芽メクム、ツノ Gum／などのクミクムと、もと同語なるへし。猶考へ

／候へ。／（貼紙）

さかかみ「」云々をかきいて、云さかしり云々五ノ廿六オ 解に、諸説を挙て、何

れ／とも定めかぬるよしへり。そか中に、逆髪・逆尻の説は、けに／よろしとも覺えず。さがは、斯賀と同意と云説は、よろしかるへし。／さるを、シヤが髪など云例なく、しや髪・

しや尻といふへければ、余後説／も非なるへしといへるは、惑へるなり。按るに、さがは、古事記に、斯／賀斯多尔、また、斯賀阿麻理などある斯の、さに転したるにて、さも／し

も・そも皆、物をさして、其シといふことなれば、己之を、しがさがとよ／めるも、又同意にて、契冲師の説、誤れるに

あらず。天人の来は、其サ（15表）が髪、其サが尻を云々といふ

こと也。又、平家物語のしや冠、宇治拾遺／のしや尻・しや類・しや足・しや衣などのしやも、此さの一転したる／にて、

之の言の略かれたるなり。さるは、人を卑しめ、罵りてもの

／いふときは、おのつから語勢強く、急言急言にはる、ものなれは、さ／の直音も、シヤと拗音の促呼促呼になり、之の言の略

かれたるにして／後世はシヤツツラなど、ますく促呼、古事記十九伝して、急言となれるにて、しるへし。

ノ志夜胡志夜の志夜とは、も／とより別語なるへし。／

いとまसानし五ノ廿八オ 解此下に、若は詞脱たるか云々。按

るに／脱たるにあらず。まつ、翁のまसानこといへるを制して、さて／しつかにおのか心を、赫映姫のいひつ、けたる也。

／（15裏）

月ころもいてゐて五ノ廿九オ 諸本に、日ころもとある、よ

ろし。／改めたるは、中々にあしかるへし。春より月を經りしにはあ／らず。七月の望の頃より、宵々に月をなかめて、

物おもひし／歎きたるが、即、此事なるへければなり。／

いはく汝をसानき人五ノ卅七オ 解の説とも、いか、。按るに、

汝をさ／交き人とは、翁と姫とをさしていへる也。汝は翁を

いひ、をसानき／人は、姫をいへり。天上にては、幼も非ず

云と、鈴木氏いへれと、こ、／交今、翁の子となりてをる

うへにて、をसानき人とはいへるなり。／さて、いさ、かな

る云々より、成にたりまでは、交へを翁にいふ詞、かくや

ひめ／は云々以下も、翁にいふ詞ながら、姫かうへの事をい

へる也。されは、まつ（16表）はしめに、翁と姫とをよひ

かけおきて、かくいへるにて、片時の／ほと、てくたし、を、

とあるも、姫を降し、事と聞ゆる也。解に／此一條、言乱脱

などしたりとみゆ、といへるは、あらず。／

此国にうまれぬるとならは五ノ四十三ウ 按、ぬるとならは、

このノ国にて、生れぬる身とならはの意也。衍にあらず。／

なめけ五ノ四十八ウ なめすの言の原は、無<sup>ナ</sup>なり。なみ<sup>ミ</sup>す、

なめノす<sup>ナ</sup>など、貴賤を<sup>ハ</sup>押並にするも、貴も賤も無く、平等に

する也。挨囊抄ノに、平をなめしと訓るも、凸凹無くする意

也。ならず、な<sup>ナ</sup>ぐ、なめ<sup>メ</sup>らノか、など皆、此類の語にて、な

めげは、無キモ同前ナルの意なり。／あるものを、あるかひ

もなきやうにする、即、無礼の義也』(16裏)

何事もやうもなしとて五ノ五十一オ 諸本、ようとある、よ

ろノし。万事不用なりとての意なり。／

〔八行空白〕(17表)

〔二行空白〕

／右竹取物語解一読之次注付所存了。堅固ノ之草案重而可遂

再校者也ノ慶応三年十二月晦日 横山由清ノ

〔六行空白〕(17裏)

### 【付記】

本稿をなすに際して、天理大学附属天理図書館より、閲覧  
と翻刻の両面で格別のご配慮をいただいた(掲載許可番号・

平成26年11月4日付・天図第828号、翻刻番号・第1169号)。明  
記して、衷心より深謝申し上げます。

(そね・せいいちノ本学日本文学教授)

\*組み版上表示できない箇所を表記

(7ウ3) 人ヲカタキトイヘル(割注本文の傍線)

(8オ8) 【また勲<sup>イサ</sup>といふ言をと】(抹消本文の付訓)

(8ウ2) よみには意なくて(割注本文の傍線)

(15ウ6) 後世はシヤツツラなど(割注本文の傍線)